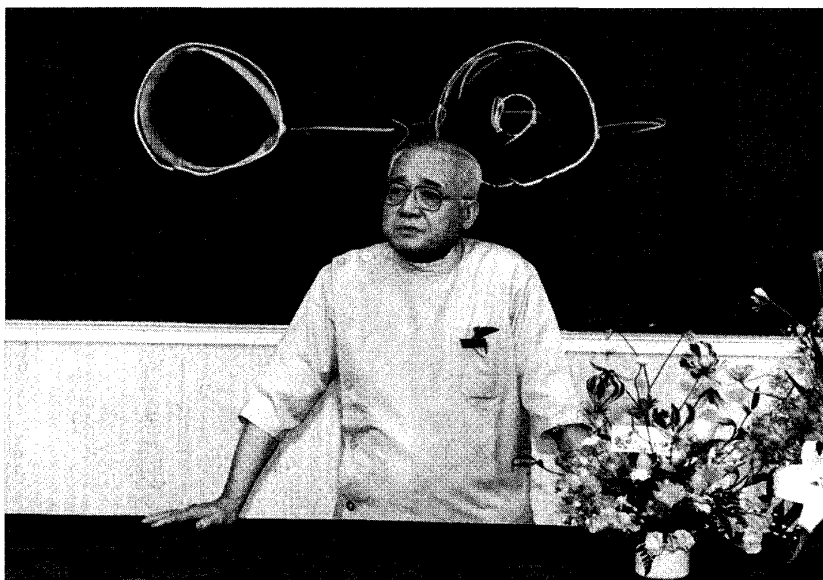
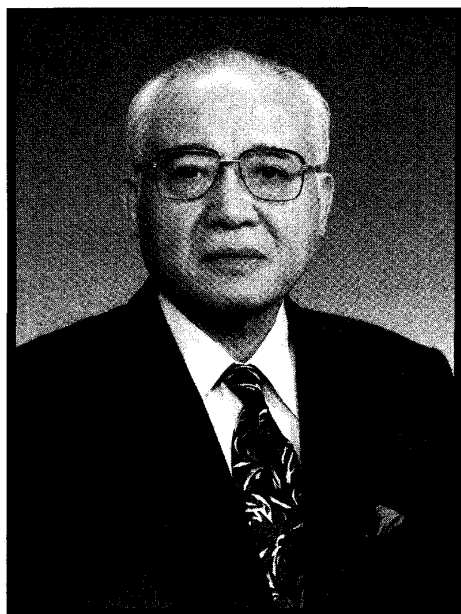


追悼

谷津三雄先生の逝去を悼む



最終講義から

日本歯科医史学会理事長 谷津三雄先生は去る平成 21 年 8 月 8 日に永眠されました。享年 81 歳。

先生は昭和 3 年 3 月 15 日に福島県に生まれ、昭和 20 年日本大学専門部歯科卒業後、昭和 28 年日本大学医学部を卒業。昭和 46 年の日本大学松戸歯科大学の創立に伴い、鈴木 勝日本大学総長（日本歯科医史学会初代理事長）の命を受け、口腔外科の助教授として赴任後、昭和 47 年に麻醉学教室の教授になりました。それから平成 5 年に退職されるまでの二十有余年、歯科医学の教育だけでなく、専門の麻醉学はもちろん歯科医学史の第一人者として、日本歯科医史学会の発展に多大の貢献をされました。そして、昭和 63 年からは日本歯科医史学会の理事長としてその大役をつとめられております。平成 15 年に、病気を患ってからは学会等でお目にかかる機会は少なくなりましたが、時々はお会いし助言を戴いておりました。

日本歯科医史学会の端緒は、昭和 42 年（1967）1 月 28 日に日本大学歯学部において行われた第 1 回集談会です。そのときの発起人の一人として、谷津三雄先生は名を連ねています。榊原悠紀田郎先生が存命のとき、「谷津君と僕とだけになったよ。発起人として生きているのは…」といわれておりましたが、今、往事を知る方は誰もいなくなっていました。

先生のご執筆は、数多ありますが、特に資料収集に基づく正確な考証を加えた集大成の著、総ページ数 520 ページ「歯学史資料図鑑（目で見える歯学史）」（初版昭和 51 年、増補改訂版昭和 55 年）、と「医歯薬史資料図鑑（目で見える医歯薬史）」（昭和 62 年）、故今田見信が雑誌歯界展望に「歯学史資料」として長らく執筆していた後をうけて「医歯薬史雑録」（120 回連載）を再度編集し加筆された「医歯薬史雑録」（平成 4 年）があります。さらに、「図説歯科医学の歴史（共訳）」（平成 3 年）の著書があります。特に、「歯学史資料図鑑」増補改訂版執筆の時は、朝から夜更けまで松戸歯学部写真室の高嶋さんと一緒に、大学卒業して間もない頃、同級生の米長君と今田君とともにお手伝いをしたのですが、あのバイタリティーはどこからくるのか、今もわかり得ていません。当時は、「そんな細かいことにどうしてこだわるのか？」

と何度も思っていました。しかし、歴史資料に関しては特にこのこだわりがきわめて重要であることを、こだわらないと史料に失礼にあたることを、最近、私自身も痛感しています。歯科医史学は門前の小僧でしたが、昨年、石井拓男、西巻明彦両先生とともに「スタンダード歯科医学史」を書くことができました。先生が亡くなったあとの出版となってしまったことが心残りです。学生教育において、史実を正確に伝えることの重要性を今あらためて認識しています。

また、先生は、歯科麻酔だけでなく日本の麻酔学会の黎明期から関わってきたお一人です。とくに昭和30年代における歯科麻酔領域への揮発性麻酔薬であるハロタン導入の先駆者です。また、現在盛んに実施されているBLS講習会の原型ともいえる「実地歯科医師のための救急蘇生法」の連載（昭和41～42年）からその必要性を強調しておりました。AEDの普及とともに盛んに救急蘇生法の重要性が叫ばれていますが、40年前にすでに述べていることから、その先見性を今さながらに実感しています。

「よ、おはよう…」と言っては、講堂に入ってこれれマイクなしで立て板に水のように講義をされていた、いわゆる谷津節が懐かしくてなりません。とにかく、厳しく、叱咤激励が教育方針の師でした。「日々全力疾走」という形容がふさわしく、「手をぬくな」が合い言葉でした。朝7時半から教授室で仕事を始め、夜はお酒がこよなく好きで、飲むほどに陽気に雑学博士ぶりを披露していただきました。約30年間にもわたって不肖の弟子をここまで育てて戴いたと、今、その存在を失い、ひしひしと寂しさとともに責任の重さを全身に感じております。

平成に入り、日本はバブルがはじけて景気低迷といわれて久しく、あまり明るい話題を頂戴しません。約100年前の1900年初頭の第1次世界大戦、世界大恐慌、スペインかぜといわれたインフルエンザ流行、21世紀初頭の現在にあまりにも似ているような気がしてなりません。形は変えても歴史は繰り返すということでしょうか。また、歯科界にもあまり明るい話題をみつけることができない昨今ですが、第二次世界大戦（先生は大東亜戦争という表現のほうが多かったと思いますが）敗戦の昭和20年に日本大学専門部歯科に入学し、全くの無の何もなかった学生時代から、そのバイタリティーとハングリー精神で昭和と平成を駆け抜けた恩師谷津三雄は、今の状況をどう思っているのでしょうか。きっと、「まだまだ贅沢だよ」といわれているかもしれません。過去を振り返り歴史から学び、その解決策の妙案を、空の上からじっと静観し「渋谷、まだまだ努力が足りないよ…」との言葉が聞こえてくるような気がします。

剛毅院成学雄道居士 合掌

日本歯科医史学会理事長
日本大学松戸歯学部歯科麻酔・生体管理学講座
渋谷 鉦

谷津三雄 略歴

職歴

昭和 3 年 3 月 15 日	福島県生まれ
昭和 24 年 3 月 31 日	日本大学専門部歯科卒業
昭和 28 年 3 月 31 日	日本大学医学部卒業
昭和 35 年 12 月 19 日	医学博士
昭和 29 年 8 月 1 日	国立東京第一病院研究医員（外科）
昭和 43 年 4 月 1 日	日本大学歯学部専任講師
昭和 46 年 4 月 1 日	日本大学松戸歯科大学歯学部助教授
昭和 47 年 2 月 1 日	日本大学松戸歯科大学歯学部教授（～平成 5 年 3 月 31 日） 日本大学松戸歯科大学歯学部は、昭和 51 年 4 月 1 日に日本大学松戸歯学部へ名称変更
平成 5 年 4 月 1 日	日本大学総合科学研究所教授（～平成 10 年 3 月 14 日）
平成 10 年 5 月 1 日	日本大学名誉教授

役職等

昭和 52 年 4 月 1 日	大学院松戸歯学研究科分科委員会委員（～平成 5 年 3 月 31 日）
昭和 53 年 4 月 1 日	日本大学松戸歯学部付属歯科病院副病院長（～昭和 56 年 3 月 31 日）
昭和 59 年 4 月 1 日	日本大学松戸歯学部付属歯科病院病院長（～昭和 62 年 3 月 31 日）
平成 2 年 4 月 1 日	日本大学松戸歯学部付属歯科病院病院長（～平成 3 年 9 月 30 日）
平成 3 年 10 月 1 日	日本大学松戸歯学部学部長（～平成 5 年 3 月 14 日まで）
昭和 52 年 4 月 1 日	東北歯科大学（現：奥羽大学歯学部）客員教授（～平成 10 年 3 月 31 日）
昭和 53 年 8 月 1 日	昭和大学客員教授（～平成 10 年 3 月 31 日まで）
昭和 56 年 4 月 1 日	秋田大学医学部非常勤講師（～昭和 59 年 3 月 31 日）
平成 元年 7 月 1 日	医の博物館（日本歯科大学）顧問

学会歴

〈国内〉

昭和 63 年 4 月 1 日	日本歯科医学会理事（～平成 17 年 3 月 31 日） ・日本歯科麻酔学会関係
昭和 48 年 4 月 1 日	日本歯科麻酔学会理事（～昭和 52 年 12 月 31 日）
昭和 59 年 1 月 1 日	第 12 回日本歯科麻酔学会総会会長（～昭和 59 年 12 月 31 日）
平成 2 年 1 月 1 日	日本歯科麻酔学会常任理事（～平成 4 年 12 月 31 日）
平成 5 年 4 月 1 日	有限責任法人日本歯科麻酔学会名誉会員 ・日本歯科医史学会関係
昭和 48 年 4 月 1 日	日本歯科医史学会理事
昭和 60 年 10 月 19 日	第 13 回日本歯科医史学会総会会長（～昭和 60 年 10 月 19 日）
昭和 63 年 4 月 1 日	日本歯科医史学会理事長（～平成 21 年 8 月 8 日） ・日本医史学会関係
昭和 56 年 4 月 1 日	日本医史学会理事（～平成 16 年 3 月 31 日）
平成 4 年 6 月 6 日	第 20 回日本歯科医史学会・第 93 回日本医史学会合同学会会長

〈国外〉

昭和 53 年 3 月 24 日	第 5 回高麗手指鍼学術大会名誉会長（ソウル）
昭和 57 年 9 月 5 日	ソ連保険局招聘による日ソ鍼灸シンポジウム特別講演（モスクワ）
昭和 58 年 8 月 8 日	中華人民共和国衛生部招聘による特別講演（北京、西安、上海）
昭和 59 年 3 月 20 日	第 6 回高麗手指鍼学術大会名誉会長（ソウル）
昭和 60 年 5 月 3 日	第 7 回高麗手指鍼学術大会名誉会長（ソウル）
昭和 61 年 8 月 24 日	第 8 回高麗手指鍼学術大会名誉会長（ソウル）
平成 4 年 5 月 4 日	中華民国台湾省歯科医学会最高顧問

審議会等

〈文部省関係〉

昭和 55 年 2 月 1 日	文部省学術審議会専門委員（科学研究費分科会）
-----------------	------------------------

〈厚生省関係〉	
昭和 49 年 11 月 1 日	厚生省歯科医師国家試験委員
〈千葉県関係〉	
平成 2 年 7 月 1 日	千葉県松戸保健保険事業連絡協議会委員
〈その他〉	
昭和 63 年 9 月 1 日	日本学術会議医学教育・医学史研究連絡委員会委員
平成 11 年 11 月 1 日	日本歯科医学会会長賞受賞

日本歯科医史学会々誌の主な掲載論文

日本歯科医史学会々誌

巻号数	発行年月	論文名
1 歯学史研究 (第1号)	1969年2月	・日本における歯科麻酔史 (10月例会, 集談会記事)
2 歯学史研究 (第3号)	1970年7月	・第1回内国勸業博覧会における歯科の出品について (総会講演抄録)
3 歯学史研究 (第4号)	1971年7月	・わが国の麻酔法と麻酔剤のあゆみ (例会講演抄録)
4 歯学史研究 (第5号)	1972年10月	・わが国の麻酔法と麻酔剤のあゆみ (講演抄録)
5		・古医書の中の口腔外科および歯科一般の記述 (講演抄録)
6		・紅毛外科書にみられる歯科口腔外科的記載について (講演抄録)
7 第1巻第1号	1973年8月	・佐藤進と口腔外科
8		・小林義直とその訳 (著) 書
9		・「よはい草」を読んで, その内容の検討
10		・「願懸重宝記」にみられる歯科の迷信, 俗信
11		・日本大学歯学部的前身—東洋歯科医学専門学校—第1回の学則について
12 第2巻第1号	1974年5月	・歯科における笑気麻酔のあゆみ
13		・わが国におけるアマルガム充填史
14		・明治年間における名古屋地方の歯科及び医事衛生一般について: 特に名古屋好生館医事研究会雑誌の記録から
15 第2巻第2号	1974年11月	・古医書にみられる精神身体医学
16		・第2回日本歯科医史学会総会
17 第3巻第1号	1975年5月	・わが国における梅毒菌の記載について
18		・わが国最初の歯科雑誌: 歯科研究会録事, 歯科研究会月報, 歯科学会月報について
19		・終戦前後に出版された医学書の二, 三について
20		・終戦直後まもない頃に出版された歯学書の二, 三について
21		・歯科薬物学書に見られる笑気麻酔
22 第3巻第2号	1975年10月	・川柳にみられる歯科医療風俗史 (第1報)
23 第3巻第3号	1976年3月	・顎関節脱臼の疾病史
24		・わが国における麻酔学書史 (第1報)
25		・歯痛の民間療法史
26		・麻酔史に関する研究: 特に「済生備考」におけるエーテル麻酔 (第1報)
27		・わが国における救急蘇生法書史 (第1報)
28 第4巻第1号	1976年7月	・歯科におけるハリ麻酔の基礎的研究: 特に抜歯に関するツボについて
29		・明治初期の頃の歯科に関する医学用語
30		・三島通良著 衛生唱歌と口腔衛生
31		・川柳にみられる歯科医療風俗史 (第2報)
32 第4巻第2号	1976年10月	・歯科麻酔学書の書誌学的研究 (第1報)
33 第4巻第3号	1977年2月	・小学人体問答書出版の時代考証
34		・川柳にみられる歯科医療風俗史 (第3報)
35		・教師用の小学人体問答書
36 第5巻第1号	1977年7月	・歯科におけるハリ麻酔の基礎的研究: 特に韓国における針灸について
37		・わが国における最初の学童口腔診査統計成績表
38		・歯科と文芸, 口, KUCHIの解題 (第1報)
39		・日本における近代麻酔の発達
40		・歯牙の衛生 (京都府歯科医師会編) について
41 第5巻第2号	1977年8月	・川柳にみられる歯科医療風俗史 (第4報)

42	第5巻第4号	1978年3月	・歯学史から見た歯と痛み
43	第6巻第1号	1978年8月	・日本における麻酔史の研究：特に、上里寿著、口腔伝達麻酔法の解題
44			・畸形児写真図譜における口腔奇形児の考証
45	第7巻第1号	1979年7月	・紫草にみられる医歯薬の商標と解説
46			・歯科助手に関するわが国最初のテキストブック
47	第7巻第2号	1979年9月	・日本医史学会発足当時の規則と月例会について
48			・三共と歯科：第1報
49	第7巻第3号	1979年12月	・大日本統計表（明治22年刊）
50			・わが国最初の歯学書：桐村克己著，“歯乃養生法”
51			・伊沢信平と歯科医術：第2回日本医学会における講演要旨（明治26年）
52			・“育児の志をり”にみられる歯科的事項
53	第7巻第4号	1980年4月	・わが国最初の「人名医語字典」
54			・終戦前後に出版された医学書の二・三について：第2報
55			・終戦直後まもないころに出版された歯学書の二・三について：第2報
56	第8巻第1号	1980年9月	・大関和（ちか）と実地看護法
57			・石黒忠恵（ただのり）と医事鈔
58			・明治元年から同10年までの医学雑誌
59	第11巻第1号	1984年9月	・養護訓導執務指針にみられる学校歯科
60			・松田良身とクロルエチル麻酔
61	第12巻第1号	1985年9月	・日本歯科医師会会報第17号（昭和12年7月刊）の内容
62			・鍼治必携（明治21年刊）にみられる歯科領域の鍼治療
63			・類聚方函（明治20年12月刊）にみられる麻酔剤と歯科用薬物
64			・津村順天堂，薬品目録（明治42年刊）からみた薬品の種類と効能
65			・弓倉教授と著書
66			・医制百年史からみた歯科と鍼灸に関する医事
67	第12巻第2号	1986年1月	・中原市五郎著「児童ト歯牙ノ関係」
68			・歯科研究会月報第49号（明治28年1月）から第52号（明治28年4月）の内容
69	第12巻第4号	1986年6月	・日本歯科医学会史（第1報）
70			・医談にみられる歯科ならびに麻酔に関する記事について（第1報）
71	第13巻第1号	1986年9月	・野口英世と切手：第1報
72			・野口英世と切手：第2報
73			・医談にみられる歯科ならびに麻酔に関する記事について：第2報
74			・ドクトル渡辺鼎（かなえ）について
75	第13巻第2号	1986年12月	・富士川游著東京医事一覧（明治23年3月27日出版）にみられる高山歯科医学院
76			・日本歯科医学会史（2）
77			・石原久先生講述：口腔科学講義全について
78			・シキライヒ原著：無痛手術全について
79	第13巻第3号	1987年3月	・大日本歯科医会編歯科医籍第壹巻（明治36年末現在）にみられる主な歯科医師名
80	第13巻第4号	1987年8月	・日本最初の医科器械カタログ
81			・救急蘇生法に関する書誌：第一報
82			・下平用彩著『診断学』：明治時代におけるベストセラーと思われる医学書
83	第14巻第2号	1987年12月	・大日本歯科医師大会々誌について（第1報）：大会記事について
84			・大日本歯科医師大会々誌について（第2報）：特別講演について
85	第14巻第3号	1988年3月	・麻酔学書誌学的研究（第2報）：喜多村敬次郎著「局所麻痺法全」（大正五年刊）について

86		
87	第 14 卷第 4 号	1988 年 8 月 ・ 歯学史集談会：第 1 回から第 4 回
88		・ 雑誌「顕微鏡」にみられる歯科の記載
89	第 15 卷第 1 号	1988 年 10 月 ・ 高山紀斎述「歯牙の人身に大関係を有する演述」
90	第 15 卷第 2 号	1988 年 12 月 ・ 昭和 15 年刊、松本秀治著「出動地に於ける歯科診療」
91		・ 「歯学研鑽」について
92	第 15 卷第 3 号	1989 年 3 月 ・ 歯科教育審議会に於いて決定せる教授要綱
93	第 16 卷第 1 号	1989 年 10 月 ・ 西南の役における軍陣歯科と麻酔に関する内容およびコレラに関する記録
94	第 17 卷第 3 号	1991 年 5 月 ・ 第 11 回日本医学会第 31 部（歯科学）分科会
95		・ 雑誌「口腔保健」と日本歯科医史学会々誌
96	第 18 卷第 3 号	1992 年 5 月 ・ 会長講演「日本歯科医史学会 20 周年の歩み」
97	第 22 卷第 3 号	1998 年 9 月 ・ 特別講演「日本歯科医史学会の歩み」
98	第 24 卷第 4 号	2002 年 9 月 ・ 特別講演「日本医史学会と日本歯科医史学会」
99	第 26 卷第 4 号	2006 年 10 月 ・ 血脇守之助「次回国際歯科医学会議を日本に開催せんとする希望に対する意見書」（昭和 6 年 2 月）について
100	第 27 卷第 2 号	2007 年 9 月 ・ 今田見信が俯瞰していた医歯一元論・二元論：日本歯科学性格研究資料類纂 歯科公報（昭和 16 年）より
101	第 27 卷第 3 号	2008 年 4 月 ・ 日本歯科医学会史（第 3 報）：大正期における総会について